研究ノート
Research Notes

実践女子大学留学生の言語活動
—「話す」活動を中心に—
Language Activities by Foreign Students at Jissen Women's University
— Centered on "Speaking" Activities —

田尻由美子
TAJIRI, Yumiko

There are currently a total of eleven foreign students from China, the Netherlands, Canada, Italy and Korea attending Jissen Women's University (JWU). There has been a gradual increase in the number of foreign students and more growth in these numbers is expected in the future. The purpose of my paper is to determine where foreign students use Japanese in their daily lives as instructional resource data for the teaching of Japanese at JWU. My research was based on interviews which I conducted with foreign students at JWU and native Japanese speakers who interact with them. The data obtained from these interviews indicate that foreign students use Japanese primarily in places such as the dormitory, shops including supermarkets and department stores, public offices such as police stations, the city hall, workplaces, or during university related occasions. As for the foreign students using Japanese with friends, the content of their conversations is not limited to specific places. The usage of Japanese was much more limited in their personal domains compared with what was found in their language usage in educational and public domains. Moreover, the data shows that most of the tasks in which they used Japanese were at the beginner or intermediate levels, while the tasks at the advanced level were very few. In order to improve the effectiveness of Japanese language instruction to foreign students, it is necessary then to introduce tasks which incorporate language content that mirrors communicative situations that take place outside the university and to provide students with detailed explanations of the instructional intent behind these tasks. An investigation of former students and their usage of Japanese in actual, broad, language-use activities

needs to be conducted to better understand Japanese language usage by foreign students.

1．はじめに

実践女子大学では，2003年より協定校からの留学生受け入れを開始した。その当初は中国伝媒大学[1]だけであったが，その後2006年4月からは韓国，さらに同年9月からはイタリア，オランダ，カナダからの受け入れが始まっている。本年，2007年度には中国伝媒大学より5名，韓国壇国大学より1名，イタリアレッチェ大学より1名，オランダのオランダ国立南大学より2名，カナダのフレーザーバレー大学より2名の学生が来日し，半年から1年の予定で学んでいる。協定校からの短期留学生受け入れは今後もその拡大が予想され，また期待もされている。このような状況において，実践女子大学日本語教育部門としては，教室の中での日本語教育のみならず，学生らの日本での学習・生活環境も踏まえた上での“実践女子大学における日本語教育”を考えていかなければならない。そのためには，まず留学生らの教室外の「日本語使用」について調査する必要がある。どこで，誰と，どのような目的で日本語を使用しているのか。それは，他の大学の留学生とは異なるであろうし，同じ大学内であっても，日本人学生とはまた異なってくるだろう。

本稿では，実践女子大学で学んでいる留学生たちが，どのような言語活動を経験しているのかをリスト化し，今後の実践女子大学における日本語教育の基礎資料とすることを目的とする。

2．先行研究

日本語学習者の言語使用場面や言語活動を調査しているものとして，田中他（1983），内海・吉野（1999），山内・鈴木（2003），山内（2004），田尻（2006）などが挙げられる。

内海・吉野（1999）は，短期留学生の言語の実際使用場面からそこに見られるネットワークを分析し，そのネットワークと日本語学習や留学に対する満足度を調査している。またそこから，人的ネットワーク形成について留学生や大学関係者などに対する提言も行っている。

山内・鈴木（2003），山内（2004），田尻（2006）はそれぞれ中国，ドイツ，インドネシアなど海外における言語活動を記述することにより，日本で学ぶ日本語学習者と

[1] 2003年当時は「北京広播学院」であったが，2004年9月に大学に昇格し「中国伝媒大学」となった。

海外で学ぶ日本語学習者が遭遇しうる言語活動がかなり違うものであることを指摘し，現地の事情にあった日本語教育のための教材作成を目指している。ただし，ここで挙げた3論文に掲載された日本語学習者の言語活動のリストは，いずれも母語話者の観察から作成されたものであり，学習者への直接の調査を行ったものではない。

また由井（2005）は日本語母語話者である大学生，大学院生を対象に自分の一日の言語使用場面を想起させ書き起こさせたリストを掲載している。そのリストから「学生といっても教員や事務職員に対する言語活動が意外に少なく，グチを聞かされる，雑談するといった類の言語活動が結構ある」（p.19）と指摘している。

3．調査

3-1．調査対象

今回調査対象としたのは，2007年度（後期）の実践女子大学国際交流センター日本語集中プログラム[2]に在籍したカナダ人留学生2名，イタリア人留学生1名，オランダ人留学生2名，およびスタディアブロードプログラム[3]に在籍した中国人留学生の5名である。また，リストには2006年度スタディアブロードプログラムの韓国壇国大学からの留学生2名に関する調査結果も加えている。これは，他の留学生がおおよそ似たような言語活動をしていたのに対し，この2名がより広い範囲にその活動範囲を広げていたためで，今期は結果として得られなかったものの実践女子大学における言語活動範囲のひとつの可能性として提示する価値があると判断したからである。

それぞれの留学生の日本語口頭能力は，Oral Proficiency Interview[4]（以下，OPI）

国籍	ＯＰＩレベル
カナダ（2名）	初－中，初－下
イタリア（1名）	初－上
オランダ（2名）	中－下（2名）
中国（5名）	初－上，中－中（2名），中－上，上－下
韓国（2006年度）（2名）	中－中，上－下

[2] 日本語能力検定試験で，おおよそ3級以下の学生を対象とする。

[3] 日本語能力検定試験で，おおよそ1，2級程度の学生を対象とし，1級を取得していれば，留学生特設科目である日本語の授業の他，学部の日本人向け授業でも単位を取得することができる。

[4] OPIとはACTFL（全米外国語教育協会）が開発した面接法であり，「最長30分という限られた時間内の面接で，できる限り信頼性のある自然発話を必要最大限採集し，それをACTFL外国語能力基準（speakingの部分）に照らし合わせて被験者の口頭能力を測定する評価法」（鎌田（1996））である。インタビューの結果から，被験者の口頭能力は，大きく初級，中級，上級，超級，さらに超級以外は上，中，下という3つのサブレベルに分けられ，合計10段階で判定される。

の結果，以下のとおりであった。2006年度の韓国人留学生２名は来日後約２ヶ月経過時（2006年６月頃），残りについては来日直後（2007年９月末）の結果である。

3-2. 調査方法および内容

調査は基本的に，調査対象への直接聞き取りによって行われ，いつどんな場面で，誰と何のために日本語で話したかについて尋ねた。聞き取り調査は不定期ではあるが，授業の前後，個人面談などの際行われ[5]，その他電子メールによる宿題提出時に任意で書き加えられる近況報告などで上がってきたものに関しても，筆者が書きとめている。また，学生から出てこなかったものについても，同じ寮に住む日本人学生，留学生のサポートをしている国際交流センター，また授業を担当している教師からの情報として，リストに加えた。

なお，「言語活動」の全体像を記述するためには，４技能（話す，読む，書く，聞く）を調査する必要があるが，今回は「話す」に限定する。

3-3. 調査対象の生活環境について

実践女子大学では，留学生は全員，「さくらレジデンス」という学生寮で共同生活を行っている。寮は４つのユニット，各ユニット５名ずつに分かれており，各ユニットには日本人学生が基本的に１人ずつ組み込まれている。国籍も，特定の国籍の学生に偏らないような配慮がなされている。個室は与えられているものの，トイレや風呂，台所は共同であり，共同スペースの掃除当番やゴミ出し当番など，ユニット内での学生同士の関わりは少なくない。

スタディアブロードプログラムの学生は１年間，週13コマ程度，日本語集中プログラムの学生は基本的に半年間，週８コマ程度の授業を受けており，そのほかバレーボールやマンガ，旅行研究，異文化交流などのクラブ活動に参加している。また，留学生１人につき２名ほどの日本人学生が「メンター」として付き，生活サポートにあたっている。

4．言語活動

留学生の日本語使用を見てみると，まず場所は，大学を中心に生活のために必須となる買い物や役所，目的地に到達するための電車，更に一部の学生に限られはするがアルバイト先へと広がっていることがわかる。また，それらの場所での話し相手は，

[5] 筆者は，調査対象となった全ての留学生の授業（日本語集中プログラム初級１コマ／週，同中級１コマ／週，スタディアブロードプログラム留学生特設科目１コマ／週）を担当している。

友人の他には，当然のことながら“その場所にいる人たち”となり，そこで何らかの仕事に従事している人が大半をしめる。つまり，一緒に行動する友人については，日本語使用の目的が場所に束縛されないことも多いが，その他の「その場所にいる人たち」については，その場所に強い限定を受けるのである。このような事実から，以下に示すリストは，基本的には日本語が使用された場所を軸として整理する。ただし，言語活動のリストを提示することを目的とする本稿において，話し相手が友人である場合に関しては別立てとした方がリストの全貌がわかりやすいと考え，分けることとする。

4-1. 話し相手が友人の場合

まず，話し相手が友人である場合について以下に示す。なお，話し相手が友人であっても，活動場所に強い影響を受けるものもあるので，そのようなものについては，場所で分類し，示した。

【友人】

＜場面束縛なし＞

・一緒に昼ごはんを食べる約束をする。
・約束していたけれど急用ができてしまったので，予定を変更してもらう。
・自分に自信を無くしている友人に，その友だちのいいところを挙げながら，自信を持たせる。
・韓国食材が売っている店の場所を教えてあげる。
・日本語の勉強法について，勉強の際苦労したところを説明する。また友人が英語や中国語を勉強する際に苦労した話を聞く。
・日本語を話す際の頭の中について説明する。
・コーヒーなどを飲みながら，「10年後，私たちはどこで何をしているかなあ」というような何気ない話をする。
・自転車の乗り方を教えてもらう。
・日本語クラスであったおもしろかったこと，クラスメイトの××さんが言ったおもしろかったことを，友だちに話して聞かせる。
・自分の国から送られてきたお菓子や食べ物を渡し，それについて説明する。
・他の国から来た外国人から「日本での生活で困っていること」などについて相談を受ける。何がどう困っているのか，原因は何かをよく訊きながら，適切なアドバイスをしてあげる。
・友人が，あまり感じのよくない男の人と最近付き合い始めた。夏休みには，一緒に旅行に行こうとしている。できるだけ傷つけないようにしながら，行かないように

説得する。
・雑誌のクリスマス特集を見ながら，国でのクリスマスの過ごし方について説明する。
・同じ漢字で違う意味を表す国の言葉について説明する。
・自分の高校時代のおもしろいエピソードについて語る。

＜大学関連場面＞

・まだ会ったことのないメンターに電話をし，大学の食堂で会う約束を取り付け，待ち合わせの場所や時間を決め，自分のことを探せるように自分の特徴などを説明する。
・初めて会ったメンターに自己紹介し，国や故郷の町の様子，家族のことなどを話す。
・お互いに好きな声優の話で盛り上がる。知っている情報を教える。
・同じ授業の学生に，休んだ分のノートを見せて欲しいとお願いする。
・授業で使用するプリントを忘れてしまったので，隣の学生に見せてもらう。
・大学祭のために，何を作るかなど話し合う。
・大学祭で，アフリカからのバンドを呼んで演奏してもらうつもりで舞台を予約していたのに，急に来てもらえなくなった。事情を運営委員に話して，舞台使用の予約をキャンセルしてもらう。
・大学祭で，自分の国について舞台の上からスピーチをしなくてはならなくなった。お祭気分で楽しんでいる学生たちに聞いてもらえるように，楽しくお国紹介のスピーチをする。

＜寮＞

・「おはよう」「いってきます！」など挨拶をする。
・寮費を，係の友人に出しに行く（リビングにいる友人に話しかける）。
・明日の会話テストのために，夜，部屋を訪ねて行き，少しの間練習の相手になってもらう。
・お風呂，台所などの掃除当番を決めるために話し合う。
・ゴミ出し当番を忘れている友人に，当番であることを教えてあげる。
・宿題のために，インタビューをする。
・「ご飯を食べたか」「咳をしているけど大丈夫か」など，リビングで軽い話をする。
・わからない漢字の読み方を教えてもらう。

4-2. 話し相手が友人以外の場合

次に，話し相手が友人以外の場合について，活動が行われた場所で分類したものを示す。

【大学】

＜授業（先生に）＞

・＜両親が国から来る／用事がある＞ので授業を休みたい旨を先生に伝え，了承を得る。
・クラスで飲み会をやることになったので，誘う。
・先週出した作文の添削を，先生がまだ返してくれない。約束の期日を過ぎているので，丁寧に催促する。
・レポートの課題内容や提出期限，提出場所などについて尋ねる。
・授業中，急に体調が悪くなってしまったので，先生にその旨を説明して帰らせてもらう。
・友人が欠席したことについて先生に尋ねられ，病気だということを伝える。
・先週，無断で授業を休んでしまったことについて丁寧に謝罪する。
・先生に出欠表を出して，ハンコをもらう。
・出欠表を忘れた旨を説明し，来週サインをもらう。
・遅刻した理由を説明する。
・試験について，自分が思っていたことと先生が言っていることが違う。自分が認識していた状況を先生に説明し，認識の相違を正す。

＜授業（学生に）＞

・話したことはないけど顔見知りになった同じ授業の人に挨拶をする。
・同じ授業の学生に，休んだ分のノートを見せて欲しいとお願いする。
・授業で使用するプリントを忘れてしまったので，隣の学生に見せてもらう。

＜国際交流センター＞

・他の留学生についての人間関係の悩みを相談する（悩みの説明）。
・呼び出しの携帯メールを受け取ったので，センターへ行って用事を聞く。
・ゴミの出し方などについて怒られて謝る。
・サマーキャンプに申し込むための必要書類などの情報を教えてもらう。
・ホームステイ先の希望などについて伝える。
・突然送られてきた「年金手帳」を持って行き，これは何か，どうしたらいいのかを聞く。
・門限を守っていないと注意されたので，謝罪し，理由を説明する。

＜図書館＞

・ビデオの視聴をしようと申し込む。

＜イベントでの活動＞

・大学祭の模擬店で，道行く人に自分の店で売っている商品をアピールする。
・大学祭の模擬店で，接客をする（注文を聞き，商品を渡し，会計をする）。
・大学祭で自分が売っているアクセサリーについてそのルーツなどを説明する。

【店】

＜スーパー・デパート・小売店＞

・携帯電話を購入する（様々な種類の中から，自分の要望や好みを伝え，情報を引き出しながら機種を選び，必要書類や手続きについて店員と話しながら契約する）。
・クレジットカードを作ろうとして，必要書類などを聞く。
・100円ショップで，タッパーを買おうと思うが日本語で何と言ったらいいのかわからない。店員に説明してわかってもらい，どこにあるのか場所を聞く。
・自転車を買いに自転車屋へ行く。値段や，どういうものがいいかを聞き，登録料，登録方法などを聞く。
・デパートで水着を買ったのだが，一回着ただけで生地がものすごく毛羽立って，色も少し変色してしまった。（電話で）事情を説明して，取り替えてもらう。
・靴の修理屋に行って「かかと」を取り替えてもらう。
・スーパーで，マイバッグのポイントカードを作る。
・レジ袋が必要かどうかと聞かれて，答える。
・スーパーマーケットで一人泣いている子供に声をかけ，一緒に「サービスカウンター」に行ってあげる。またそこで，状況を説明して保護者を見つけてもらう。

＜郵便局＞

・国に荷物を送るのに，どういう方法がいちばん安いのか尋ねる。
・国から送ってもらった荷物が届かない。どうなっているのかを問い合わせる。
・郵便局から手紙を送る。

＜レストラン・居酒屋＞

・友人の誕生日会をすることになり，お店を予約する。いくつかの店に電話して，コース料理の内容や飲み放題の有無，個室の有無などの情報も得，その上で店を決め予約する。
・予約していたお店に電話して，予約の人数を減らして欲しいとお願いする。

【役所】

＜警察＞

・駅前に自転車を止めておいたら，なくなっていた。警察に行って事情を説明する。

・夜，新宿で警察官に職務質問をされたが，運悪く外国人登録証を持っていなかった。警察官に自分の身分や今何をしているかを説明し，登録証を持っていなかったことを丁寧に謝る。

＜市役所＞

・駅前に置いておいた自転車が撤去されてしまった。いつ，どこに置いていたのかを説明し，どうやったら引き取れるか（返してもらえるか，いくら罰金を払わなければならないのか，今自転車はどこに保管されているのか，どういう手続きが必要なのか）を聞く。

・国民健康保険料を払う。

・外国人登録をしに行く。

＜領事館＞

・自分が今持っているビザでは，どのようなアルバイトがどのくらいまでならできるのかを聞く。

・ビザの延長はできるのか，できるとしたらどういう条件でできるのか，聞く。

【町の中】

・「何人なの？」「発音がおかしい」と言ってきた下校中の小学生と話をする。

・道に迷ってしまったので，＜コンビニの前でたむろしていた高校生に／バスを待っているおばさんに＞道を聞く。

【学校外での教育的活動】

＜ホームステイ＞

・自己紹介し，自分の国などについて説明する。

・国の風習について聞かれて説明する。

・ホームステイを終えて帰る時，丁寧にお礼を述べる。

・ホストファミリーからお風呂に入れと言われたが，他人と同じお湯につかることは考えられない。相手は好意で言ってくれているので，傷つけないよう丁寧に断る。

＜習い事＞

・英会話を習おうといくつかの英語学校に行き，料金やシステムについて質問し説明を受ける。

・市が主催するいけばな教室に申し込む。

＜国際交流活動＞

・近くの小学校の国際交流授業で自分の国を紹介する。小学生からの質問に答える。
・小学生と一緒に遊ぶことになったので，ゲームのルールを聞く。

【電車で】

・改札を出ようとしたところで，切符をなくしたことに気づいた。新宿から乗ったこと，切符を買ったのになくしてしまったこと，探したけどなかったことなどを，改札にいる駅員に説明し，どうにかお金を払わないで済むようにしてもらう。
・アルバイトで新橋に行くことになった。日野から新橋までの定期代について尋ねる。
・立っているのも大変そうなお年寄りが優先席の前に立っているが，誰も席をかわってあげようとしない。優先席に座っているサラリーマン／学生に，席をゆずってあげるようにお願いする。

【アルバイト】[6]

・お客さんから注文を受ける。
・他のアルバイト店員から，レジの使い方や注文の受け方，料理の出し方などを教えてもらう。
・お客さんに料理の食べ方などを説明する。
・お客さんから，「食器が汚れていた」「料理が遅い」などとクレームを受け，謝る。
・アルバイト初日，上司や職場の人々に自己紹介し，挨拶する。
・アルバイト雑誌を見て良さそうなアルバイトを見つけ，電話し，外国人でもできるのか，できるとしたらいつ面接に行ったらいいのかを聞く。
・履歴書に記入し，面接を受けに行く。また，疑問点などを質問する（研修期間とはいつまでなのか，シフトはいつ決まるのか，週末は休めるのか，交通費は出るのか，など）。
・シフトに入っている日に，別の用事ができた。他のバイト仲間に事情を説明して代わってもらう。
・シフトに入っている日に，大学の授業が入った。店長に申し出て，その日は休ませてもらう。
・もらった給料が，自分の計算と合わない。店長に申し出て，確認してもらう。

---

[6] アルバイトを経験したのは，2006年度に在籍した韓国人留学生２名のみであり，ここでの言語活動は彼女達のものに限られる。

5．考察

ここまでに得られた言語活動について，先行研究と比較しながら，その特徴を探ってみたい。まず，海外在住の日本語学習者の言語使用を記述した山内・鈴木（2003），山内（2004），田尻（2006）と比較すると，当然のことながら実践女子大学で学ぶ留学生の方が言語使用場所として得られた範囲は広かった。海外においては数少ない観光地やレストラン，領事館などが多くなるのに対して，本調査では，大学はもちろんスーパーや小売店などの店，交通手段である電車，各種手続きのための役所，またホームステイや習い事などの広がりをみせた。また，それに伴い話し相手についても海外に比べてバリエーションが豊富であった。しかしやはり，由井（2005）で報告されているような母語話者と比較してみると，特に話し相手については，質的に異なった傾向が見られる。2節でも引用したように，由井（2005）では母語話者の言語使用場面において教員や事務職員に対する言語活動はあまり多くなく，グチを聞かされたり雑談をしたりという言語活動が「意外に」多いことを指摘している。しかし本稿のリストからは，そのような傾向は得られなかった。

CEFR[7]（ヨーロッパ共通参照枠）では，言語活動を公的領域（public domain），私的領域（personal domain），教育領域（educational domain），職業領域（occupational domain）の4つに分けているが，グチや雑談というのは私的領域に属するものである。私的領域における言語活動は，母語話者の場合，親しい友人に加え家族との間にも行われるが，留学生においては友人との間にしか起こらない。このような視点から改めて本稿で収集された言語活動を見てみると，公的領域や教育領域での言語活動が非常に多く，私的領域に属する言語活動が少ないことがわかる。つまり，友人との“日本語での何気ない会話”のようなものがあまりないのである。これは，言語的，時間的制約などから私的なことまで話せる日本人の友人がなかなか作れないという現状を表しているのだろう[8]。実践女子大学留学生の私的領域における言語活動は，日本語で話す友人がいるかいないか，もしいるならばその友人とどのような活動をするかによって大きく左右されるといえよう。

また，他のリストとの共通点としては，意見を述べたり説得したりという，先に触れたOPIの判定基準でいうところの超級タスクはほとんどなく，情報を得るために

---

[7] Council of Europeによって作成されたCommon European Framework of Reference for Languages; Learning, teaching, assessmentの略称で，国際間における多言語対応のための相互互換システム。

[8] 調査の際の個別面談などでも，本当に悩み事を相談できるような親しい日本人はいない，という言葉が留学生からしばしば聞かれた。また一方で，同じ国の学生同士で，もしくは留学生同士で固まってしまう傾向については，留学生の周りにいる支援者からも指摘があった。

尋ねたり，簡単な依頼をしたりするような，文レベルで片付く中級タスクが多いことが挙げられる。

6．まとめ

本稿では，実践女子大学留学生の言語活動について調査，収集し記述した。ここで収集されたリストや考察は，日々の授業での活動やシラバス作成に活かされるものである。今後は，本稿で扱った「話す」活動について調査を更に続けていくことに加え，「聞く」「読む」「書く」についての言語活動調査を行っていきたい。また，更に大きな視点から，先行研究のリストも踏まえて，実践女子大学のみならずあらゆる環境にある日本語学習者の言語活動についても分析を広げ，その枠組みを構築していきたい。

参考文献

内海由美子・吉野文（1999）「短期留学生の日本語実際場面の実態と分析―ネットワークの観点から―」『千葉大学留学生センター紀要』5，pp.30-55，千葉大学留学生センター

鎌田修（1996）「OPI」『日本語教授法ワークショップ』P.203 凡人社

田尻由美子（2006）「インドネシアにおける言語活動―中部ジャワ地域を例とし地域に根ざした教材バンク作成に向けて―」『岡山大学言語学論叢』12，pp.39-50，岡山大学言語学研究会

田中望・中畠孝幸・古川ちかし（1983）「外国人の日本語行動」『日本語教育』49，pp.59-73，日本語教育学会

山内博之・鈴木美恵子（2003）「曲阜師範大学における日本語教育実習―言語活動の教材化の試み―」，『実践国文学』64，pp.1-18，実践国文学会

山内博之（2004）「言語活動の目録化と教材バンク作成の指針―ドイツの VHS の学習者を例にして―」『南山大学国際教育センター紀要』4，pp.41-46，南山大学国際教育センター

由井紀久子（2005）「日本語教育における『場面』の多義性」『無差』12，pp.1-22　京都外国語大学外国語学部日本語学科

Council of Europe (2002) “Common European Framework of Reference for Languages: Learning, teaching, assessment”, Cambridge University Press.